

「天気予報と降水確率」

【第15回】天気予報と降水確率

このコラムを読んでもうすぐ夏、外はどのような天気ですか？

掲載から日が浅いうちに読まれている方の地方では未だ梅雨明けしていないのではないのでしょうか。（執筆者の地域では平年日が7月19日）

雨が多い時期なので天気予報をいつも以上に注意深く見ていたりするのではないのでしょうか。気象業務（天気予報）を生業としている我々も実はネットやテレビなどの天気予報はチェックしています。なぜならブリーフィング先で「〇〇ではこう言っていたけど？」と比較され質問を受けることがあるためです。（他の予報官にもいますよね？と、同意を求めてみる…。）

他にも「なぜ一般に報じられている天気予報と違うのか」であったり、「降水確率は何%なのか」であったりの質問を受けることがあります。特に私の経験上、イベントごとのある時に顕著に聞かれている気がします。このような違いが出るのは「航空自衛隊の気象隊が行う気象予報とネットやテレビなどで報じられている天気予報には『航空気象』と『生活気象』という違いがあるから」という説明が簡潔なのですが、今回は「降水確率」についてのお話をしていきたいと思えます。

まず、天気予報に対して「あたらない」というイメージを持っている人は多いのではないのでしょうか。巷の様々なアーティストたちも楽曲の歌詞で天気予報を外させていませんか？（この職種に配置されてからすごく気になる。）

ドラマや映画でも雨ってずっと降っているか、急に振り出さず濡れになるかの場面が多くないですか？予報がその予報通りにあたる話では自分では自衛隊3部作で有名な作家さんが書いた某広報室のテレビドラマで入間気象隊が晴れるタイミングを予報したエピソードくらいしか思い当たりません。

ところで、そもそも天気予報の「あたり」や「はずれ」って何をもって判断するのでしょうか。多くの方は予想された現象が起こるかどうかではなく、自分の期待通りかそうではないかという“気持ち”で判断していないのでしょうか？

天気予報は予報区というものが設定されており、予報の地域的・時間的範囲によって使い分けられています。その日の予報であれば市町村や、更に細かい地域で報じられますが、週間予報だと都道府県単位だったりしますよね。

雨、降水についてはその予報区内で一定の時間内に1mm以上の雨または雪の降る確率(%)の平均値で0, 10, 20..., 100%とこの間を四捨五入して表現されます。例えば降水確率30%という予報であれば、30%の予報が100回発表されたときに、そのうちの30回は1mm以上の降水があるということで、量の予報ではありません。





また、先ほど確率は四捨五入して 10%単位で発表すると説明しました。ということは 5%未満であれば 0%と発表され、96%であれば 100%と発表されるというわけです。そのため、例え降水確率が 100%の予報でも雨が降らないこともあります。さらに「1 mm 以上の降水」を対象としているので、1 mm に満たない降水（専門的には“トレース”といいます。）は 0%でも問題ないわけです。（ただし、実

用上の見地からは雨又は雪の降りにくい状態に用いることが好ましいとされています。）そして、予報区内のどこかで降水が観測されていればそれは「降水あり」となるため、同じ予報区内でも“降っているところ”と“降っていないところ”が発生します。

近年は予報精度も向上し、予報の時間間隔も短くできるようになってきました。それでも予報は万能とは言えません。予報がどのようなことを伝えようとしているのかを知ったうえで利用していただければ皆さんの中で天気予報の「あたり」が増えてくれるのではないのでしょうか。web などでは世界各国の気象機関の情報や予想資料に触れやすくなってきていますので、それらのソースからご自身で予報してみるのも一興かと思います。

